

明治時代のギリシヤ思想普及史

総合政策学部四年 木村尚美

序章

- 一、古典軽視の西洋化
- 二、ギリシヤ思想研究の始動と社会的関心
- 三、大衆社会への普及の試みと失墜

終章

序章

現代日本において、古典ギリシヤ思想は社会一般にあまり知られていない。専門の研究者の間では、明治中期から現在に至るまで大学を中心に研究が進められてきた。しかしそれは一般社会にまで共有されているとは言い難く、専門家と社会一般の間のギリシヤ思想に対する理解は、近代西洋思想のそれに比べて大きな隔たりが感じられる。

日本の歴史を外国文化からの影響の観点で区分すると、大化改新の律令制導入に始まる日本の「中国化」、その中国化された古代日本を封建制に作り変えた鎌倉・足利・徳川幕府による日本の「日本化」、そして、明治維新の文明開化に始まる日本の「西洋化」のよ

うに三段階に分けて通観することができる^一。その中で、中国の古典である儒教思想は、長い時代を経て既に我々の思考様式の一部となり、日本文化の中に浸透しているのに対して、明治維新から約一

五〇年程しか経過はしていないとはいえず、ギリシヤ思想は私たちの思考や文化、または精神史上の一部としては存在していないようである。

現代日本社会が、自由、平等、博愛の理念に象徴されるような近代の西洋思想の影響を強く受けているのは言うまでもないが、その淵源に位置する西洋古典であるギリシヤ思想について議論されることは多くない。そもそも、近代西洋思想と古代ギリシヤ思想の関係性についてはヨーロッパの学者の間でも意見が分かれている。一方は、神学中心の中世から古典回帰の現象としてのルネッサンスから啓蒙思想が生まれることから、ギリシヤ古典―近代の学問の繋がりを強調し、またもう一方は、古代、中世からの脱却として近代思想の誕生を主張する立場など、その見解は様々である。

日本国内では、京都学派の内山勝利氏は、前者の立場に立ち、「相互批判」や「根源的思考」は古代ギリシヤ思想に由来するものであり、西洋の根幹をなすものとしての西洋古典も西欧化の道を辿った日本にとってわれわれに直結した古典としての位置を占めつつあると論じている^二。筆者も内山氏と同様の観点から、なぜ、西洋の根幹であるギリシヤ思想について広く知られることがなかったのかについて研究することにした。明治時代の日本は、「西洋化」の根幹をなす古代ギリシヤの精神性をどのように吸収し、咀嚼または拒絶してきたのかという観点から日本近代史を概観していきたい。

本研究は、明治時代に学者たちによって学ばれたギリシヤ思想が、どのように社会に発信されたかに焦点を絞って日本の受容を観察

する。その観点から、学者によるギリシヤ思想研究の進展の観点から明治時代を三つに区分し、それらの時代区分に対応する新聞雑誌の論稿から社会一般の西洋古典に対する関心の高さを推定する。本論文は、社会一般への受容を分析するため、識字率が九八%を越えて大衆社会が形成される明治後期を最後の第三章とする。第一章、第二章では、第三章で扱う明治後期に至るまで、学者と社会においてギリシヤ思想の受容にどのような段階を経て、関心が向けられていたかを明らかにし、第三章への足掛かりとしたい。

一、古典軽視の西洋化

日本で初めて公的に西洋思想研究が始められたのは、安政三（一八五六年）に設立された江戸幕府直轄の蕃書調所である。黒船来航以後、西洋語の研究機関として発足し、森有礼、西周、津田真道、加藤弘之、箕作麟祥、西村茂樹など、藩の洋学者たちが集められた。彼らの多くは、幼少期から藩儒や親族から儒学や国学を学び、黒船来航の前後で洋学へと転向した者たちであった。明治時代に入りますます洋学の必要性を確認した彼らは、明治維新の啓蒙思想家として近代化の思想的リーダーとなっていた人物であった。

本章では、ギリシヤ思想研究の先触れとして明治初頭の啓蒙思想家たちが、西洋思想のどこに重点を置いていたのか、東洋古典に精通する彼らの西洋古典に対する見方について考察し、それらが後世に与えた影響について触れていく。

(1) 啓蒙思想家による儒教思想からの脱却

明治維新の啓蒙思想家のなかでも最も影響力の大きかった人物として福澤諭吉が挙げられる。福澤は、主に蕃書調所で教授を務めていた洋学者たちによって結成された日本初の学術結社「明六社」において、はじめに社長候補となった人物であった。「明六社」では、福澤自身が固辞したために、社長の座は発起人である森有礼が務めることとなったが、その後も官設アカデミーである東京学士会院の設立時にも最初の会員に指名される^三ことから、明治初期の洋学者たちの間でも信頼の厚い人物とされていたことが推察できる。

日本の近代化において重要な役割を果たした福澤であったが、日本の「近代」は後世の日本史家たちが明治維新から始まったと規定したもので、福澤を含め当時の知識人たちにとって近代性という理念を實現することを目標に掲げた近代化革命ではなかった^四。富永健一氏によると、明治維新以来、日本の知識人が「西洋化」として考えてきたものを構成している諸要素は、近代国民国家の形成、市民革命、科学革命、啓蒙主義、産業革命といった五つの「近代性」の要素に還元することができる^五と指摘し、明治初期の思想家たちにとって「近代性」とは、西洋化として日本に入ってきた文化伝播のことであり、それが「文明」の名で呼ばれたものであった^六と論じている。

この近代性を示す理論の一つに、実証主義がある。それは、知識の源泉を事実についての科学的観察のみに求め、それ以外のいかなる源泉によるものをも知識として認めない^七とするものである。実証主義は、科学主義の方法的視点の優位性を唱え、相対的に「神学的」、「形

而上学的」知識の没落を導くものであった。実証主義を社会学に適用したフランスのオーギュスト・コントは、「人間の知識の状態（「精神的」側面）が「神学的」「形而上学的」「実証的」という三状態を経過し進化していく^八」としたように、福澤は、「文明論とは人の精神発達の議論なり」また、「文明とは結局、人の智徳の進歩と云って可なり^九」と述べて、人類の知識の進歩史観を採用した。科学的思考方法に基づいた実証的知識に到達するまでの前段階を、一九世紀ヨーロッパではこれらを「退歩的精神^{一〇}」と呼び、福澤は「古習の惑溺^{一一}」と呼んだ。つまり、福澤が「洋学」として指すものは、西洋の長い学問の歴史から学ぶものではなく、近代に始まった科学的思考による学問に限定し、即ちそれは同時に古典輕視と表裏一体となっていた。

儒教思想輕視の姿勢の端緒は、日本が近代西洋思想と出会って初めて生れたものではない。それは、江戸時代後期にすでに潮流となっていた、徳川時代の統治は、儒学の教義上の理想とはかけ離れているにも関わらず、理想社会として描かれた周代と同じ封建制を採用していたことから、当時の現行制度は歪められながら儒教的に合理化されていた^{一二}。したがって、明治の啓蒙思想家たちは儒教の価値体系そのものをあらかじめ克服しなければならなかったことと、十九世紀ヨーロッパの大勢であった実証主義の思想が共鳴し、日本に積極的に導入された。

古典的な学問からの脱却を試みたのは福澤だけではない。「明六社」の会員の一人で、「フィロンファイ」という原語から「哲学」という訳語を創ったことで知られる西周もその一人である。西が受容した

「哲学」は当時のヨーロッパの潮流である実証主義的經驗論を指し、それは「従来の漢学に含まれた形而上学的理想主義的な程朱の宋学に対抗する古学に属する徂徠学の精神が新規の形式を以て表出されたもの^{一三}」であった。西と共にオランダ留学を果たした津田真道も、仏教や儒教など従来の学問を「高遠ノ空理を論スル」もので、それらが「虚学^{一四}」であると否定した。

明治維新の西洋思想受容の第一人者である洋学者たちの全てが、漢学、儒学、国学などの東洋の古典に思想的基盤を確立しているにもかかわらず、自由に事実を直視し、現実に即した新しい発想が尊ばれた。明治初期の啓蒙思想家が辿った「西洋化」の道は、江戸後期の儒教批判の傾向と重なり、知識の進歩史観を採用する実証主義による限定的な「西洋化」であった。このような背景から、日本は「西洋化」や「欧化」という旗印を掲げながら、非実証主義的な儒教思想の排斥と同時に、西洋の古典であるギリシャ思想を疎外しながら西洋思想受容を行っていた。

(2) 実学傾倒の教育制度の確立

本節では、本論文の第三章の明治後期の知識人たちや大衆の思考に決定的な影響を与えてゆく明治初期の教育政策について扱う。重要な点は、日本の近代的教育制度は、前節で述べた古典輕視の潮流の中で確立された点である。

明治初期の社会状況は、江戸時代からの士農工商の階級身分制が改められた際に行われた身分別の戸籍登録から概観することができる。

明治四（一八七二）年の各身分の人口比率を見ると、華族が〇・〇〇八一％、士族が五・五％、平民が九三・四％である^{一五}。福澤を含め、西洋化という名の近代化を目指す啓蒙知識人たちにとって近代的教育制度によって、平民の自覚を促すことは必要条件であり、様々な議論が繰り広げられた。

日本初の総合的な教育法令である「学制」が頒布されたのは、明治五（一八七二）年である。この草案にあたったのは、「明六社」の会員であった箕作麟祥らであった。この「学制」は、江戸時代における日本の教育が藩学校や庶民のための寺子屋教育など各地域で下からの自然発生的な形で行われていたものを粉碎し、国家の手によって上から強行的に組織化されたという点において日本社会に大きなインパクトを与えた。小学校では、福澤諭吉の『啓蒙手習之文』や『西洋事情』等がそのまま教科書として用いられていた^{一六}ことから、明治初期の啓蒙思想家は明治の日本人の思考を直接的に規定してゆくほど広範な影響力を持っていたことがわかる。

また、柿沼肇氏の『近代日本の教育史』では、「学制」の頒布にあたって太政官が出した「学事奨励に関する被仰出書」には、福澤諭吉の『学問のすすめ』の影響が強く滲み出ていることに言及されている^{一七}。その「学制序文」による理念には、「空理虚談の途に陥」るような封建的教序ではなく、「日用常行言語書算」をはじめとする実学であるべきことが示されていた^{一八}。この「学制」には政府内部からも、「知育偏重」と批判され、儒教主義的德育政策を行うべきだという主張も西村茂樹らから主張された^{一九}。しかし、このような古典重視の提

言に対しても伊藤博文や、福澤諭吉らがまた批判を展開し、儒教主義的德育政策は行き詰まりをみせ、それに代わる方針をめぐって活発な論争が繰り広げられた^{二〇}。

その後、明六社結成の発起人である森有礼が初代文部大臣となって明治十九（一八八六）年、新たに「小学校令」「中学校令」「帝国大学令」を制定した。イギリス、アメリカ留学を経験した森有礼は「普通心^{コモンセンス}」を基礎に置いた德育政策を念頭に国家主義的教育再編行いつつ、儒教主義的德育政策の克服に力を注いだ^{二一}。この時森によって構築された学校体系が、その後幾度かの改編を経つつも大もとでの変更なしに敗戦後の「教育基本法」「学校教育法」による新教育体制の成立までの間ずっと保持され続けていったのである^{二二}。

（3）知識としてのギリシャ史―『明六雑誌』

これまで、明治初期の啓蒙思想家のなかで、福澤諭吉、西周、津田真道、森有礼らの古典の学問に対する姿勢について考察してきた。本節では、彼らのような洋学者が社会へ向けて発信する場として右に挙げた啓蒙思想家が結束した学術結社「明六社」が発行していた『明六雑誌』のなかでギリシャ思想がどのように扱われていたかをみてゆくことにする。

明六社は先に挙げた森有礼がアメリカから帰国してまもなく、洋学者たちを集めて明治六（一八七三）年に結成された。明六社の活動は、雑誌発行のみならず、新聞広告で聴聞希望者を募って演説会を隔週で

開くなど、積極的な西洋新知識による啓蒙活動を行っていた。その影響は、近刊の『植木枝盛日記』によって都下の青年や知識層に大きな波紋を巻き起こしていたことが推知されている^{二三}。また、明治初頭は日本における雑誌の誕生の時代であり、『明六雑誌』が発行されるまで、国費支弁の『文部省雑誌』などを除けば、雑誌と呼ばれるものほとんどは宗教、医学関係のものに限られていた^{二四}。この背景から、直接時事批判を行う現在の総合雑誌の要素を持った初めての雑誌でもあった。

『明六雑誌』全一五七稿のうち、ギリシャに関する語が一字で含まれるものは、内十稿である。西洋思想受容の最先端に位置する彼らが社会に発信するものとして、西洋の古典はほとんど重視していなかったことが、この全論文の中に占める割合からも伺える。その中で、最も詳細にギリシャ思想、またはギリシャ史について記述しているのは、箕作麟祥である。

箕作「人民の自由と土地の氣候と互に相関するの論」

(モンテスキュー『法の精神』からの抄訳)

昔時「希臘」^{ギリシャ}の碩儒「アリストートル」が云く、およそ「亜細亜」人は、機知ありて技芸に巧なりといえども土気なきがゆえにつねに聽順して、あえて自由なるを欲せずと^{二五}。

この文は、『明六雑誌』全論稿の中で唯一みられるギリシャの思想

家自身の言葉の引用文である。本文がモンテスキュー著『法の精神』の抄訳であるように、西洋古典に関しては、明治維新の啓蒙思想家が熱心に取り入れようとした近代西洋思想の中から断片的に知識として吸収されていた。

箕作麟祥「リボルチーの説(二)」

アテンス国(アテネ)はこれ(スパルタ)に異なり、初めて真に確認をして自由の権を得せしめしゆえに、かのペリクルスが波斯(ペルシャ)と戦い国のため死を致せしアセンス人を弔する文につきこれを觀るときは、すなわちその人民みな、その国政に参預するの権を有し、もつてその代理者を選挙し、またその家事を治め、器具・衣服・飲食を備うる、みな己れの意に任せ、治平無事るときはもっぱらその意を修文・啓智に注ぎ、かならずしも練兵・体操をもつてその主務となすを要せず。互に好むところの書を読み、互に思うところの説を唱え、あえて自由ならざるなきを見るべく、ゆえにアテンスの人民はひとり勇敢にして氣胆あり、よく危険を冒し、自ら顧みざるのみにあらず、その文事に嫺い、学芸を講ずる、当時世上にその比なし。

右の引用文がギリシャ史について詳細に論じている唯一の論稿である。ギリシャに関する記述のある全十稿のうち、残りの八稿はほとんど、人名や地名を言及しただけのもので、それに関して深い考察は行われていない。これからわかることは、明六社の啓蒙知識人たちは、西洋近代思想を学び取る過程で、ギリシャ古典が西洋の古

典として位置づけられていることは知識として知って居た。受容する西洋思想を、長い西洋思想のどの部分を指しているのかについて確認せず、近代の実証主義的な思想のみを取り入れ、儒教排斥の必要性から非実証主義的な古典の学問に対しては、東西を問わず消極的であった。

(4) 新聞投書からみるギリシヤ史への関心―『朝野新聞』

一節、二節では、古典軽視の西洋思想受容の中でギリシヤ思想、ギリシヤ史についてどのように扱われて、上からの西洋化が進められたかについて考察した。彼らは、西洋古典に対しては消極的であったことがわかったし、その明治初期の思想界をリードしていた学者の中でそれは共通していたため、その古典軽視の姿勢は上からの教育制度と同時に押し図られた。しかし、全くの同時代、儒教的徳育論争が行われたことから明らかのように、社会全体が古典軽視に賛同していたわけではない。「明六社」に所属していないものの、儒教などの素養を持った人々には、質を異にする西洋古典は珍しいものであったに違いない。

本節では、政府の立場に非常に近かった「明六社」の人々による古典に対する姿勢とは、異なる見解を持った人々の関心についてみていくことにする。同時代に『朝野新聞』で多くの論稿が見られた。明治初期の新聞社は、旧幕臣として活躍し高い教養と国際的な感覚を備えた人材を招聘し、近代ジャーナリズムが誕生した^{二六}。リテラシーに大きな格差がある明治初期の新聞界は、「中等以上ノ人民」を対

象とした「大新聞」と「下等社会」に向けて書かれた「小新聞」に区別され明確な棲み分けがなされていた^{二七}。「大新聞」の主な購読者は官庁、官吏、他に豪農や豪商も読者であった。一方「小新聞」は「大新聞」よりも読者の層が広がったと考えられる。本節で扱う『朝野新聞』は、「大新聞」の中でも例外的に「小新聞」の読者層と一部重複していた新聞である^{二八}。

渡辺雅弘氏の『日本西洋古典文献史』によると、朝野新聞における古典ギリシヤの論稿は、明六社の活動が停止した明治八（一八七五）年からみられる。

明治九年（一八七六）九月二七日・投書 西黒門町 中山松満

政府ト云ヒ社會ト云フモ亦其ノ識見ニ偏スルヨリ或ハ當時ノ人情に乖戻スルノ議論ヲ發スル者有レバ其ノ是非ヲ問ハズ徒ニ奇異ノ看ヲナシ此レヲ捕ヘテ囹圄ニ幽シ悲風酸露ニ呻吟セシメ甚シキハ磔〇ノ鬼ト爲ルニ至ル是レ〇安ヲ僥倖セントスル者ノ所爲ニシテ歴史上ニ〇（サン）然タルナリ此レヲ西史ニ徴セバ古來最モ著シキ一項ヲ得ル即チソクラテスノ冕刑是レナリ（以下、ソクラテスの死）

明治十一年（一八七八）六月三十日・投書 紀伊 東直之助

吾輩當テ希臘史^{ギリシヤ}ヲ引証シテ競争ノ利源ハ一〇シテ軋轢ノ毒窟ニ陥ル、有ルヲ論辨セシガ今又國家盛衰ノ因ヲ分カル、所以ノ理ヲ希臘ニ徴證シテ聊カ黄〇ヲ鼓セントス（以下、アテネとスパルタの比較）

新聞の投書から、右のような詳細な論稿を見ることが出来る。明治初期にすでにこれだけの文章をかくことができるということは、すでに江戸時代から藩で教育を受けた者であると考えられる。

新しい古典と出会った日本は、それに対して無関心であったわけではない。古典軽視の風潮が社会の上層部から推し進められるなか、また別の知識人の間では、西洋古典から学びとろうとする姿勢もすくなくからずあったことがこの投書からみることができた。

二、ギリシヤ思想研究の始動と社会的関心

明治中期は、西洋思想を日本に流入した啓蒙思想家たち自身と、またそれを受けた社会の両者にとって、自らに根差した儒教を中核とする伝統的価値観と新しい西洋思想の心情と論理との乖離に気付き、反動化が起きた時代であった^{二九}。また、東西思想を同一次元において包括しようとする試みもなされ始めていた^{三〇}。

明治の雑誌界は、学術雑誌と評論雑誌との区別を明確にし、多額の保証金を規定した明治一六（一八八三）年四月の新聞紙条例の改正と明一七、一八年を頂点とするデフレの進行等によってそれまでの多くの雑誌は廃刊に追い込まれ、日本の雑誌界は一挙に刷新された。それには、教育の普及と進歩が読者層を変革しつつあった^{三一}ことなども要因の一つであると考えられる。

近代教育制度は少しずつ整い始め、就学率は明治二四（一八九二）年に五〇％を上回った。明治中期は商業誌時代の黎明期でもあり、新聞や雑誌の読者層は就学率の向上と共に拡大し、幅広い階層の人々が流入する西洋思想の研究たちからの情報を目にする事ができるようになっていた。

（一）東京帝国大学

近代学問の最高峰である東京大学は、明治一九（一八八六）年に明六社の発起人である森有礼が文部大臣となり、勅令の形式を以て「帝国大学令」を公布した。それによって、森と対立していた東京大学総理加藤弘之を更迭するという強権を発動させ、大学の質的転換が行われた^{三二}。東京大学は東京帝国大学に改称され、従来の自然主義、個人主義、自由主義の思潮からドイツ学派重視へと転向した^{三三}。幕末以来怒濤のように侵入した英米系の西洋思想から、漢学、国学がふたたび見直されると同時に、サンマー、サイル、モース、およびフェロノサといった一群の外人教師たちによってドイツ観念論に代表される理想主義哲学が植えられ始める^{三四}。

ギリシヤ思想研究は、この東京大学から東京帝国大学への変革を期に日本で開始された。熱心にギリシヤ思想研究を始め第一人者となったのは、大西祝^{はじめ}であった。

大西は、「西洋化」に突入した明治時代の第二世代目の思想家といえる。彼は帝国大学教師ブッセから影響を受け、理性のみを判断基準

とした「批判主義」を貫き、ドイツ哲学、特にカントの研究者として知られている。ドイツ学派を学び、ドイツ語の「アウフクレーリング」、英語の「エンライトンメント」に対し、「啓蒙」という訳語を充てた人物であると考えられている^{三五}。

大西祝に関する研究は、平山洋氏の『大西祝とその時代』（日本図書センター発行）で一九八九年刊行時までの先行研究も含め包括的に編纂されているため、以下は当研究を参考に大西の思想とギリシャ思想との関係にのみ焦点をあててまとめていくこととする。

大西は、岡山藩士の子として岡山城下で生まれ、すでに新しい実学中心の教育制度の中で学んだ。岡山県に宣教師ワレス・テラーが赴任してきたことをきっかけに、大西の親戚らが次々にキリスト教に入信したことから、幼少の頃からプロテスタントイイズムの影響を強く受けていた。明治十（一八七七）年の大西が十四歳のとき、同志社に入った。

同志社は、元治六（一八六四）年に禁制を犯して函館から脱出しアメリカへ向かった新島譲によって創設された。彼は初代文部大臣森有礼とも交流があった^{三六}。その新島が明治八（一八七五）年に創設した私塾同志社英学校に大西は創立の二年後に入学した、ほぼ初期の学生の中の一人であった。

七年の同志社での生活を終えて、明治十七年（一八八四）大西は上京し東京大学予備門に編入、東京大学文学部に入学した。その文学部は入学から半年後に東京帝国大学文科大学となる。彼はそのまま大学院に進み、給費研究生となった。のちに、坪内逍遙が招いて早稲田大学

の前身である東京専門学校で教鞭を執り哲学、倫理学、論理学、英語講読を教えた。明治三一（一八九八年）には、ドイツに留学したが、翌年ライプツィヒ留学中に重い病を患い、帰国して一九〇〇年に三十七歳の若さで他界した^{三七}。

大西のギリシャ思想への関心は、ドイツ学派の影響を受ける以前、同志社時代のキリスト教思想研究の中にその萌芽をみる事ができる。大西は若くして論壇デビューを果たす明治十五年七月二八日出版のキリスト教系週刊新聞である『七一雑報』で「論基督教之道德」の中で、すでにギリシャ道徳からキリスト教倫理へのモチーフが示されている。

東京大学文学部へ進学後、大西は創刊開始からまもない『哲学会雑誌』で詳細なギリシャ思想研究の成果を連載する。『哲学会雑誌』を発行する哲学会は、明治二十（一八八七）年二月五日に元明六社の会員である西周、加藤弘之、中村正直、西村茂樹や、井上円了、外山正一らによって創立された。帝国大学での勉強の成果である哲学である諸論文は主にこの雑誌に発表された。

- (第五号) 明治二〇年六月五日 諸言アイオニア派
- (第六号) 明治二〇年七月五日 ピタゴラス派・エリア派
- (第七号) 明治二〇年八月五日 ヘラクリタス学派
- (第八号) 明治二〇年九月五日 物質学派
- (第九号) 明治二〇年一〇月五日 ソフィスト
- (第十号) 明治二〇年一一月五日 ソクラテス（一）

- (第十一号) 明治二〇年十二月五日 ソクラテス(2)
 (第十三号) 明治二一年二月五日 ソクラテス 弟子ノ学派
 (第十六号) 明治二一年五月五日 プレトール氏伝記
 (第十七号) 明治二一年六月五日 プレトール氏の哲学(1)
 (第十八号) 明治二一年七月五日 プレトール氏の哲学(2)
 (第二十号) 明治二一年九月五日 アリストートル氏伝記
 (第二十四号) 明治二一年一月五日 アリストートル氏の哲学
 (第二十八号) 明治二一年六月五日 ペリパドス学派
 (第二十九号) 明治二一年七月五日 エピキュラス学派
 (第三十二号) 明治二一年十月五日 エピキュラス学派続
 (第三十三号) 明治二一年十二月五日 懐疑学派

右の一覧に加えて、『哲学会雑誌』には、明治二十年の六月号から明治二十二年の十一月号にかけてほぼ毎号十七回にわたってイオニア派から始まる古代哲学史を簡単にまとめた「西洋哲学小史」が無記名で連載されている。平山によると、当時の帝国大学哲学科生のうち後に『西洋哲学史』を著したのは大西だけであることから、その筆者も大西であると推定される^{三八}。以上のように帝国大学で師事していたブッセの強い影響を受け、大西は『西洋哲学史』として西洋古代哲学を次々に紹介した。

大学院へ進み、給費研究生の立場で研究を続けている大西は、明治二二(一八八九)年の東京専門学校(現早稲田大学)での「古代希臘の道德と其基督の道德」と題した講演を行った。そこで、大西のキリス

ト教思想を通したギリシャ思想への関心がより明確に示されている。

「古代希臘の道德と基督教の道德」『全集』第五卷、三八四頁

近世の欧羅巴の道德上の思想は之を形造る要素から云へば基督教の思想ばかりではなく、又希臘の思想ばかりでもなく両者の混合である。欧州の思想には此二箇の要素があることを知り、又明に其要素の何たるを知らなければ逆も現今の思想を解することは出来ぬ。

この講演では、西洋思想理解にはキリスト教とギリシャ思想の両方が不可欠であると学生に訴えている。帝国大学文科を首席で卒業した大西の、この喚起は東京専門学校に少なからず影響を与えただろう。大西のこの姿勢は翌年の講演「希臘道德が基督教道德に移りし次第」へと引き継がれ、大西の一貫した研究テーマとなっていた^{三九}。

明治二三(一八九〇)年七月五日から十五日まで、キリスト教青年会主催の第二回夏期学校に講師として招かれた。他の講師には、東北学院、宮城学院の創設者である押川方義、『横浜毎日新聞』社長で衆議院議員となり議長を務めた島田三郎、植村正久、伴直之助、中島力造等、キリスト教系の知識人が集っていた。小説家島崎藤村もこの講演を聴きにきていた。ここでの講演で、大西はギリシャ思想からキリスト教思想への変遷を研究する意義を明らかにしている。

「希臘道德が基督教道德に移りし次第」『全集』

此の希臘の道德が基督教の道德に移り行く次第は、之を考究^シべるに

夫自身の価値があるばかりではなく、是で幾分か我日本現在の道徳思想の有様を照すことは出来まい乎。

大西は、このように明治維新で大転換を経て、日本の道徳思想がゆらいでいることに注意を払い、ギリシヤの道徳からキリスト教の道徳への変遷を研究することが、当時の日本にとって何かを指し示す手掛かりになるのではないかと考えた。そこには、日本と西洋の異質な思想を「批評」という手段を用いてより高い次元へと導き、建設的業務を果たそうとする大西の姿勢が伺える。

納富信留『プラトン 理想国の現在』（慶應義塾大学出版会、二〇一二年）によると、大西は特に哲学者プラトンを尊敬し、プラトン対話篇の言語から翻訳するために、日本語の哲学文体そのものを作り出す必要があった。彼は格闘したが、精神失調を来たし、その目的は達成されなかった^{四〇}。結局大西の精神失調が原因となり、大西によるギリシヤ語からのプラトンの翻訳は達成されなかった。

(2) ギリシヤ思想とロマン主義―『女学雑誌』

東京帝国大学の変革を以て開始された日本における西洋古典の研究は、大学内に留まらず民間雑誌でも多く取り上げられた。商業誌時代の幕開けである明治中期におけるギリシヤ思想に関する論稿は、『女学雑誌』『教育時論』『教育報知』『日本人』『国民之友』等様々な主義主張の立場の雑誌で取り上げられている。本節では、それらの雑

誌の中で、最も多くギリシヤ思想に関する論稿を連載した『女学雑誌』に着目する。

『女学雑誌』は、『日本人』の創刊者三宅雪嶺によって「教育界の三雑誌」^{四一}の一つに数えられた雑誌である。この『女学雑誌』において長く編集者を務めた人物は巖本善治は、大西祝も講師として手う学を教えていた明治女学校で教頭を務めながら、当初の編集人であった近藤賢三の突然の死によって、第二四号から廃刊に至る直前の第五二三号まで、編集人を務めた人物である。

『女学雑誌』とは、「欧米の女権と吾國の女徳とを合わせて完全の模範を作り為さんとする」^{四二}ことを主旨とした、日本の女性解放運動を推進するための啓蒙雑誌である。しかしながら、対象とされた読者は女性だけではない。啓蒙的な社説の論稿の中で、「世間普通學校の卒業生諸君よ」^{四三}や、「少年よ」^{四四}といった呼びかけが用いられていることから、男女を問わず「女性の地位の向上を願うあらゆる人々」がその対象であることがわかる^{四五}。日本の婦人論はすでに明六社の中で大きく取り扱われており、明治中期に至るまでに日本の近代化の中で重要な社会論争の一つであり、『女学雑誌』の発刊はその流れを汲むものであると捉えることができる。

その『女学雑誌』の代表的編集者である巖本は、前節で取り上げた大西祝が生まれる一年前、文久三（一八六三）年に出石藩士井上藤平と妻律の二男として生まれた。彼は、一四歳で上京し、明六社に所属する思想家の一人である中村正直によって設けられた同人社で一八歳になるまで四年に近い歳月を学んだ。同人社を去った後に入った学

農社で、『女学雑誌』の初期創立者となる近藤堅二と出会い彼を助け
て編集に携わり、やがて近藤の後を継ぎ自身が代表者となった。巖本
も明治十六（一八八三）年の二〇歳のときにキリスト教の洗礼を受け
ており、『女学雑誌』に一貫している中心思想は、中世主義、女学、
ホーム、キリスト教であった^{四六}。

『女学雑誌』の中でギリシヤに関する論稿が扱われているのは、巖
本が編集人となった明治十九（一八八六）年から明治二五（一八九二）
年までである。それらの論稿は大きく以下の様に分類できる。

- (一) 格言の抜粹「項目…「言行」、「珊瑚の珠」」
- (二) 歴史上の偉大な人物として名前のみ掲載
- (三) 女性解放運動の論拠としているもの
- (四) ギリシヤ思想の考察

(一)と(二)においては、扱われている本文こそ短い、「欧米
の女権と吾國の女徳とを合わせて完全の模範を作り為さんとす^{四七}」
というその使命を果たすべく、伝統的東洋思想と新しい西洋思想を並
列にして示し、東西問わず選び取る姿勢を読み取ることができると
女性解放運動の先駆けともなった『女学雑誌』ならではの記事であ
る(三)は、日本初の心理学者である元良勇次郎や、明六社のメンバ
ーであり、初代東京大学総理を務めた加藤弘之ら錚々たる人物が寄稿
している。

加藤は第四九号に寄せた品行論において、社会の開化にとって女性

が権利を得ることが重要であると述べて、「半開の國では、妻だの妾
だのを多く有つことを許して居るから、女の権利が立って居りませぬ
^{四八}」と、女性の権利の低さを、文明の発展度に結びつけた上で、「ギ
リシヤ、ローマでは(省略)、女は男の爲めに壓制されましたけれど
も、アジアの女ほどの壓制は受けなかつた^{四九}」と論じている。

また、元良勇次郎は第二八七号において、「古代に行はれたる男女
の關係に就て研究したる人少なからずと雖どもマクレナン及びモル
ガンを持つて大家とす、彼らの説互に齟齬する所あり或は又其論中
に吾人をして臆説なりとの感を懐かしむるもの少なからずと雖も太
古にありて必ずしも男尊女卑の風俗ありしを断言するものは一ツも
之れ無きなり^{五〇}。」と、男尊女卑が東西一様の風俗であつたとする説を
否定する。

元良の主張は、「古代の神秘學は其根原明かならずと雖も一説によ
れば此れ古代の人情智識等に移したるものにて當時の人民の爲めに
は小説、科學、政治學、哲學等を含むたるものなり、故に此頃所謂
社會學なるものよりは其形状科學的に適ふ所なきにも拘らず其の
實は當時の人情を現はすに最も適したるものなり」と、神話から古代
の風俗を推測する妥当性に言及した上で、「神秘學に於ては顯はした
る男女の關係如何を考ふるに必ずしも男尊女卑ならず、伊弉諾尊、伊
弉冉尊、の天下り給まふたること、天照大神が天地に光を發すること
又希臘の神秘學に於てアセナ(アセナは希臘に於て軍事、智識、工業
等の女神にしてゾースなる天神の女なり)なる神がゾースの頭より生
れたること等の話に至ては何を以て之を女卑と名くるを得るや^{五一}」と、

男尊女卑が古来から伝わる風習ではないことを主張するために、日本の神話とギリシヤの神話の両方に言及している。

(四) について引用

以上のように、『女学雑誌』はギリシヤ思想に関してよく取り上げていた。連載もあった。しかし、明治〇年まで続く『女学雑誌』において、突如として明治二六（一八九三）年から「ギリシヤ」の文字が消える。それは、なぜ起こったのか、『女学雑誌』が抱えていた読者層との関係から考察していく。

ギリシヤ思想に関する論稿が消える明治二五（一八九二）年は、『女学雑誌』の改編の年であった。この『女学雑誌』の編纂からギリシヤ思想を受容した読者、そして受容を好まなかった読者を推定することができる。それは、『女学雑誌』は、大きく二つの社会層を読者に抱えており、両層のニーズのギャップを抱えながら、均衡をとりつつ度々雑誌の分離と統合を繰り返しながら一八年余出版を継続させてきたためである^{五二}。その社会層とは、一つは、「女性の向上に理解と熱意をもつ進歩的な男性と、これに追随しうる少数の進歩した女性との一群」であり、またもう一つに、『女学雑誌』の指導によって自身を啓発し、自己の向上を図ろうと望む後進的な女性の一群^{五三}である。『女学雑誌』にとつてはその使命達成のために、この両層どちらも切り捨てられない層であり、論説的記事をニーズとして持つ上層部と、後進的な女性が占める下層部の両層の期待に答えなければならなかった。

その両極の社会層の要求に単一の雑誌として答えられなくなり、明

治二五（一八九二）年第三二〇号の『女学雑誌』は、論評を中心とした白表（甲）と文学を中心とした赤表（乙）に分裂する。発行当初から抱えていたその二つの社会層は、ここで上層部が白表へ、下層部が赤表へと明確に区別されることとなる。

この改編以後、ギリシヤ思想に関しての論稿が残されていたのは、上層部のニーズに対応した白表（甲）であった。一方の赤表（乙）は、下層部へのニーズに応える形で、白表から離脱し、明治二六（一八九三）年には文芸中心の『文学界』と名称を変えた。この『文学界』は、明治日本の文芸運動の拠点となる。つまり、当初の『女学雑誌』が抱えていた下層部の読者層は、明治二〇年代から三〇年代にかけて西洋から受容されたロマン主義^{五四}の方へと進路を大きく変更した。ヨーロッパでのロマン主義は、一七世紀後半から一八世紀の約百年間の間主流となった啓蒙主義に対して、その反動として内面の感情を解放するロマン主義が一八世紀末、ドイツやイギリスを中心に始まり、一九世紀半ばにかけて全ヨーロッパへと拡大し、展開していった。日本では明治二六（一八九三）年の『女学雑誌赤表（乙）』の後継である『文学界』を中心として移植され、それは後に『明星』に継承されて明治期の「浪漫主義」として確立していった^{五五}。与謝野晶子、高村光太郎、石川啄木らが注目を集め^{五六}、後に夏目漱石が「浪漫主義」と名付けた。日本ではわずか二〇年の啓蒙主義のあとすぐにロマン主義を受容したことになる。ロマン主義を受容する明治二〇年代は、日本哲学界においても実証主義的経験論の単一的な受容からギリシヤ哲学研究やドイツ型観念論等、分化と深化が広まる時期と同時期であった。

古典主義や合理主義の反動としてロマン主義と、理性に重きを置くギリシヤ哲学とはその性質上相容れない。ギリシヤ思想研究の胎動期にロマン主義が輸入されたことが、日本の下層部にギリシヤ思想が広く受け入れられなかった一つの要因であるといえる。明治二五（一八九二）年まで、最も多くギリシヤ思想に関する論稿が見られた『女学雑誌』と対照的に、その後分裂した下層部向けの赤表に、ギリシヤ思想に関する論稿が全く扱われていないということから、ロマン主義を好む読者からは好まれなかったということが明らかである。

（4）国粹主義の立場からの受容―『日本人』

明治中期に、ギリシヤ思想による啓蒙を試みたのは、キリスト教や女性解放運動の影響を受けたもののみではなかった。国粹主義の立場から主張を行った明治二一（一八八八）年創刊の『日本人』でも、ギリシヤ思想から知識を学び取るうとする動きが見られる。

（一）歴史

（二）思想

（一）は、明六雑誌で行われていた作業と類似のものである。国粹主義が、単純に西洋思想の排斥を行おうと試みたのではなく、文明開化に必要な要素を古典、近代を問わず学びとり、日本の文明開化に繋

げようとする意図が、『日本人』第二号巻頭の論稿から察することができる。

志賀重昂「日本人」が懐抱する處の旨義を告白す『日本人』第二号

「予輩は徹頭徹尾日本固有の○分子と保存し○元素を維持せんと欲する者に非ず、只泰西の開化を輸入し来るも、日本国粹なる胃官を以て之を咀嚼し之を消化し、日本なる身体に同化させめんとする者也、（省略）国粹なる胃官と以て他邦より輸入したりたる開化を消化し同化し

たる實例は太だ尠しとせず、彼の歐洲文物典章の淵源たる希臘の開化

ギリクス

は如何、「ヘーリン」民族（希臘の人類）がフェニシアより輸入したる文明開化と自己が固有の國粹を以て消化同化したるものにして、所謂一種特殊なる「希臘の開化」と〇起したるものなり」

上記の志賀重昂と共に『日本人』の創刊に参加した教育家、実業家の菊池熊太郎は、自由民権運動の中で、アリストテレスの政治学から学び、論じている。

菊池熊太郎「近世ノ「アリストクラシー」ニ『日本人』二十四号

「二千二百餘年の昔「アリストートル」は政体を分類して君主政治、貴族政治（アリストクラシー）共和政治の三種となしたりしが、近世に至りては第二種の政体即ち貴族政治は最早や開明社會より其跡を絶つの氣運に至りたり（省略）然るに議員資格の區域を狹隘に制限し、

一國の極小部の人士のみに参政の大權を附與するの有様にては、余輩は「アリストクラシー」の臭氣を衆議院に注入したるものと見做し、甚だ遺憾に思はざるを得ず」

また、匿名であるが、東京帝国大学で進められる哲学研究に対する反響を伺うことができる記事もある。

鐵拳居士「哲学涓滴を讀むを讀む」批評 『日本人』第三十四号

「近世哲學を説くに、先づ中世紀より近世紀に移易する際に於ける思想の傾向を一言し、又古代哲學を近世哲學説明の参考として掲ぐる」とは、評者と同じく筆者に切望して止まざる所なり。」

西洋古典との出会いは、東京帝国内のみではなく、言論界で広く共有されていた。東洋と西洋の再定義の時代に、両者をもう一度見直す動きの中で、西洋古典に対する受容はより積極的に行われ始めたといふことができる。

三、大衆社会への普及の試みと失敗

明治時代に入り、急速に都市人口は増加していた。東京市では、明治一八（一八八五）年には、人口九九九、〇二三人であったが、十年後の明治二八（一八九五）年には、人口一、三三九、七六二人となっ

ていた^{五七}。

明治後期はコミュニケーションの大衆化、つまりマス・コミュニケーションが胎動しはじめる時期である。明治二七（一八九五）年に全国で七七・一五%であった就学率も、『プラトーン全集』発刊一年前の明治三五（一九〇二）年の時点で九五・八%に至っている^{五八}。

新聞読者の大衆化が進むと同時に、「大新聞」は政界の沈滞と運命をともにし、衰退を招いていた。御用新聞の『東京日日新聞』は経営不振に陥り、社長の福地源一郎は明治二一（一八八八）年に引退を余儀なくされた。

新聞読者の大衆化が進行し、小新聞は、「下層の人民」の様々な社会的不平や不満を煽りたて、政治の世界に社会的不満がナマのまま噴出するものとなっていた^{五九}。下層階層はしばしば「車夫」や「馬丁」で代表されるが、明治初期には所得が低く、不安定な車夫が自宅で新聞を購読することはなかったが、彼らのような最下層の人たちでさえ、約一軒に一紙の割合で新聞をとっていたことが『平民新聞』明治三七（一九〇四）年三月六日の記事から推定される^{六〇}。下層階層のなかには、産業革命とともに形成された職工、職人階層が大きな比重を占め^{六一}、これが本章で取り上げる労働者を対象とした『二六新報』『萬朝報』の隆盛の背景であった。

明治三六年、ようやく『プラトーン全集』の初の日本語訳が出版される。学者間では狂信的として後に排斥されてしまう木村鷹太郎が、英語からの重訳ではあるが、明治時代の日本社会へギリシヤ思想の普及に最もよく貢献した人物である。木村鷹太郎の翻訳は大衆紙におい

ても大きく取り上げられ、一段と日本社会の西洋古典思想への理解が高まるかと思われた。しかしその直後、日露戦争の開戦により、全ての民間雑誌からギリシヤに関する論稿が消えた。

(1) 初の『プラトーン全集』 日本語訳出版

『プラトーン全集』の第一巻が明治三六（一九〇三）年に刊行された。この著書の第一巻は留学先のライプツィヒで大西と共に過ごした心理学者の松本亦太郎（一八六五—一九四三）と木村鷹太郎との共訳で、第二巻以後は木村一人の手によって完成された。この著書は戦後京都大学のプラトーン哲学研究の権威である田中美知太郎も少年時代に木村訳を読み、興味を深めていったというエピソードを残しているほど、後世にまで影響を与えたものである。

この木村による『プラトーン全集』は、一八九二年にオクスフォード大学出版局から五巻本で刊行された、十九世紀後半のもっとも定評あるプラトーン訳を英語からの重訳で日本語に翻訳したものであった。原典からの翻訳ではないという点で、後のギリシヤ哲学研究者たちからは価値のないものであるとみなされるようになったが、戦前には木村訳の『ポリテイア』（『理想国』）が決定版であり続けた^{六二}。

木村鷹太郎は明治三（一八七〇）年に宇和島城下に生れた。大西の六歳年下にあたる。大阪で中学校を卒業した木村は明治二一（一八八八）年に東京の基督主義の学校である明治学院に入学する。二四（一八九一）年には、帝国大学文科大学の哲学科の生徒となる。木村は、

『東洋倫理学史』を出版する際に、その師であり、日本哲学界の権威である井上哲次郎が高く評価した序を寄せるなど、研究者の間のその評価は低くはなかった。しかし、『世界的研究に基ける日本太古史』（二巻、明治四四、四五年刊）では日本の上代歴史は中央アジアやギリシヤの出来事だと信じ、世の慢罵冷嘲を受けた。ギリシヤ語を研究した結果、日本民族の原始性について諸々の新説を出し、日本の歴史上の人名や地理地名を中央アジア、ギリシヤ、ローマ、エジプト等のそれに跡付けて奇抜な対比を試み、世人を驚かせた^{六三}。

木村訳のプラトーン著『ポリテイア』を翻訳した『理想国』の文体は、『論語』で孔子が弟子たちに語る説諭に類似していた。

余曰く、君の言う所大なる誤りに非ず。

彼れ曰く、然りと雖吾等の仲間は何人も君は知せるか。

勿論知せり。

君は是等凡ての人々よりも強力なりと思へるか。

若し夫れ然らざらんには、君は現に、今ま在る所に在らざる可からず。

六四

後世の我々から見れば、論語に似せたプラトンの文体は、異様に感じられるかもしれない。けれども、東洋と西洋の太古史の対比を行った木村自身には自然な日本語訳であったのだろう。さらに、儒教思想を基盤とした社会において、ギリシヤ思想を最も抵抗が少なく受け入れるために最も有効な手段であったとも考えられる。

また彼は、『理想国』第一巻初版の巻末に予告された「大要」にも、

「日本の武士道に酷似す」と記されてある^{六五}と記されていることから、その類似性を強調し、日本人にとって親和性の高いものとしてギリシャ思想を紹介することに注力していた。

(2) 大衆紙による宣伝―『二六新報』

明治後期になって大衆ジャーナリズムの時代が到来した。その代表格である『二六新報』で、木村鷹太郎による『プラトーン全集』は盛大に宣伝された。

『二六新報』は、明治三六（一九〇三）年頃、東京でもっとも発行部数の多かった大衆新聞である。その盛況ぶりは、雑誌『新声』（三四年、三月一六日号）では、「現時の新聞社会に在りて、最も華々しきは『二六』也。」と評価されている。新聞の売れ行きだけではなく、『二六新報』が主催した明治三四（一九〇二）年四月三日の労働者大懇親会は大盛況で、その読者層の中核は職工、職人階層であったことはたしかであった^{六六}。

二六新報を創刊した秋山定輔は、慶應四（一八六八）年に現在の岡山県倉敷に商家に生まれ、明治十一（一八七八）年に岡山の学校で学び、上京した後、明治二十（一八八七）年で帝国大学法科大学に入学した。秋山が入学したこの年は、は東京大学が帝国大学へと改称し、英米的な教風からドイツ学派重視の傾向へと転向した翌年であった。秋山の息子、秋山一によって編纂された『秋山定輔伝』では、秋山は「なにものおおそれず真理実践にとびこんでいく激しい理想主義が

その命であった」としてその人物像が描写されている^{六七}。学問においてのみならず、秋山は理想政治を実現するために政治の世界へ足を踏み入れ、孫文の大アジア主義に展望を掲げ、孫文と盟約を交わすなど言動ともに理想主義を追求した人物であった^{六八}。

帝国大学卒業後は当時としては自然な流れであった官僚としての道に進んだが、わずか一年間で辞職、新聞を創刊して経営を始めた。『二六新報』の創刊は、明治二十六（一八九三）年であるが、当初は軌道に乗らず、エリートを読者層とした高級紙から、平民や労働者を読者として想定した大衆紙へと切り替え再刊して成功の道が切り開かれた。二六新報は廉価と三面記事に力を注ぎ、三井攻撃、娼妓自由廃業をはじめとするセンセーショナルなキャンペーンを行って読者を広げていった。『二六新報』は急速に発行部数を伸ばし、十五万部に達するなど、東京においてトップクラスの新聞となった^{六九}。

秋山がギリシャ思想を世に広めようと試みたのも、大衆からの人気を博しているピークであり、日露戦争に入る前年の明治三十六（一九〇三）年が最も顕著であった。

明治三十六（一九〇三）年第一八一五号の第一面の論評「哲學書類の翻譯」というタイトルで哲学の翻訳を心待ちにしているのが伺える。

同業者の報ずる所に依れば、富山房は這回井上博士を中心とせる、赤門出身の学士博士に囑して、遠く歐亞思潮の淵源に遡り其典拠となれる哲學書類を翻譯し、逐次之を刊行す可しといふ。之吾學界の爲に久敷望んで未だ得るに至らざりし吉報なり。

『プラトーン全集』発刊から約一ヶ月後の、明治三十六年一月二日には、第一面の新著精鑑の項目で訳者を褒め称えている。

多量の健全なる思想を含蓄せるプラトーン全集の右の如く適當なる翻譯者を得て、邦字にて読まるゝに至りしをば、眞に我國民の爲めに○すべきとなれば、吾徒は譯者の勢を多とし、又之を出版せし〇〇の大〇と公共心とな○せずして止む能はず

当時一五万部という発行部数は異例の数であり、このような秋山の理想主義も、明治後期に現れた大衆の心を一時的に掴んでいたといえる。

(3) 『二六新報』の失墜と『萬朝報』の逆転

哲学の必要性を説き、啓蒙活動に励んだ秋山であったが、その後、不運にも二六新報は約十万もの読者を失ってしまった。その契機となったのが、露探事件である。

この事件は、明治三七（一九〇四）年三月一日の『二六新報』がそもそも桂内閣に批判的であった上に、前年六月一七日の日露協約成立という誤報、および秋山がロシアのスパイ（露探）であるという噂と組み合わせられて、国民の厭戦気分を煽っていると議会で追及されるに至った事件である。秋山が露探であるという証拠を見つけることは

できなかったが、報道が日本にとって不利となったことは認めるといふ報告がなされ、引責決議が衆議院を通過して、議員を辞職せざるを得なくなった^{七〇}。秋山は衆議院議員としても桂内閣を批判していたため、政府にとって警戒すべき存在であった。

『二六新報』は、秋山辞職後に、露探門内で秋山および同紙に対して猛攻撃を加えた『萬朝報』と論争を起こした。『萬朝報』は、『二六新報』と読者層が大きく重なり、社会批判性の強い三面記事やリベラルな論調を売りとするライバル紙を、ここぞとばかりに批判した。こうして日露開戦前に一日十四万部以上を売り上げていたにも関わらず、その効果は大きく、評判を落とした『二六新報』は、発行部数を三万部台にまで落としてしまった。

一方、凋落した『二六新報』によって、社会の労働者層の人気を得た大衆紙は『萬朝報』であった。『萬朝報』は、「不偏不党」を貫き、明治二五（一八九二）年一月一日に創刊された安価な大衆紙で、翻訳小説の筆者としてすでに活躍していた黒岩涙香によって『二六新報』より以前から発行されていた。

編集者の黒岩涙香は、文久二（一八六二）年に土佐藩に生まれ、明治十一（一八七八）年に大阪専門学校の寄宿舎に入った。官吏の道を進むように知人や家族に薦められても断っていた。『萬朝報』を発刊する以前の黒岩は、『今日新聞』や『絵入自由新聞』、『都新聞』など様々な「小新聞」に小説を連載していた。黒岩が就任してから『都新聞』の紙数は三倍に伸び、すでに人気抜群の翻訳作家となっていた^{七一}。明治二五（一八九二）年に『萬朝報』を創刊した。『萬朝報』の人気

の理由はやはり小説であった。明治二四（一八九一）年の『二六新報』が刊行される前の時点では、東京における新聞界の順位は『東京朝日新聞』『都新聞』『萬朝報』の順であった^{七〇}。

露探事件によって、大衆の秋山に対する信頼が揺らぎ始めると、『萬朝報』はここぞとばかりに、二六新報を攻撃するキャンペーンを打ち、『二六新報』から読者を奪い取ることに成功した。

両紙はどちらも「不偏不党」を謳い、反権力的姿勢を貫きとうした大衆紙で読者層が一致していた。さらに、当時の国民にとって最大関心事である日露戦争論に関しても、明治三六（一九〇三）年十月頃に桂内閣に批判的だった『二六新報』も、非戦論で奮闘していた『萬朝報』も両紙とも開戦論に転向しているためこの点に関する両紙の大きな相違はない^{七三}。

ライバル紙として露探事件を契機に形勢が逆転する両紙には、その両紙の編集者たちの教育観において決定的な違いがあった。

『プラトーン全集』発行する九カ月前の『萬朝報』の第一面最上部に位置する「言論」の主題は以下の通りである。

「速やかに漢文を廃止すべし」言論 明治三六（一九〇三）年一月一日
「吾人と雖も、シナの経〇が将来日本國民の任である事は善く知って居る。然しながら、それは國民の一部が専門の事として當れば善い。（省略）それが爲に全國民の教育に無用なる漢文を強ひらるゝは迷惑至極の事と云はねばならぬ。」

普通教育として漢文の存在が、何ほど知識の普及を妨げ、他の學科の進

歩を害する〇〇、今更らくだくだしく説くにも及ばまい。吾人は只、帝國主義者の虚栄と野心との爲に、國民の智徳の進歩に大妨害を興へらるゝに忍びぬ者である。」

『萬朝報』は明らかに明治初期に確立された福澤由来の実学傾倒の流れを汲んでおり、古典軽視の姿勢である。普通教育における漢学は実学に必要な知識を得る学問を妨げ、他の學科の進歩をも害すると、弾圧の姿勢である。

『プラトーン全集』発行と同月、『二六新報』では、盛大に取り上げ、哲学を用いて國民の啓蒙を試みていたのと対照的に、『萬朝報』では全く正反対の議論で、古典を読むべきでないと大衆に訴えている。

黒岩涙香「讀書の説」言論 明治三六（一九〇三）年十月四日

「余は思ふ新なる書を読む可し。近時諸新聞諸雜誌に多く讀書の勧めの見ゆるを觀るに、新刊の書を貶して古書を称揚する者も多し。誠に知識日新の勢に遠かる者と云う可し。」

明治初期の啓蒙思想家たちにより設立された大阪開成所の流れを汲む大阪専門学校で学んだ黒岩にとつては、ギリシャ思想や西洋哲学、儒教的教養すらも無価値であった。

『二六新報』から『萬朝報』への十万部もの読者の流出は、この学問観、教育観の違いによって生れたのではなく、日露戦争という日本が一丸にして戦争に臨まなければならぬ緊張した社会状況の中で、

不運にも秋山自身が失脚したことを原因とするものであった。その事件による『二六新報』に対する大衆のイメージの悪化は甚だしく、隆盛を期していた『二六新報』を撃墜し、図一に見てとれるように、明治三十六（一九〇三）年から三十七（一九〇四）年にかけての東京新聞界の構図を見事に一転させるほどであった。

	1903年	1904年	1914年
二六新報	142,340	32,000	50,000
万朝報	87,000	160,000	100,000

図一
明治末期新聞推定発行部数（出典：有山、竹山『メディア史を学ぶ人のために』、一〇五頁）

明治後期の哲学界と大衆を結ぶ架け橋となりえた秋山定輔の失脚は、後の日本におけるギリシヤ思想の普及を妨げる事件であったことは否定することはできない。この事件の後、一九〇四年から人々の最大関心事項は日論戦争となり、ギリシヤ思想に関しては、『二六新報』の後継『東京二六新聞』を除いてはほとんどみられなくなった。一方で、研究機関でのギリシヤ思想研究は伸展

し、大西祝^{はじめ}らが設立した丁酉^{ていゆう}倫理會^{りんりかい}発行の『丁酉倫理會倫理講演集』やキリスト教青年会の機関誌である『六合^{りっくわ}雑誌』における論稿の数は

増大していった。

終章

明治中期以降の言論界は日本の西洋思想移植の実証主義経験論から理想哲学主義というプロセスによって、東京帝国大学とそれ以外によって二層に分断されていた。宗教蔑視、古典蔑視の傾向の強い実証主義論者の明治維新の担い手によって設立された教育機関と、明治中期に西洋思想が体系的に移植され始める東京帝国大学の教育とは、古典軽視、古典尊重、現実主義と理想主義という相容れない思想が日本で形成され、二種類の知識人を生む原因となっていた。その二種類の思想上の分岐点は、一つには帝国大学に進学するか否かという学歴の長さ、またもう一つはキリスト教の影響を受けているか否かによって、古典軽視と古典尊重とまた、形而上学への態度とを決定的なものとなった。その教育上の違いはまた、副次的に現実主義者と理想主義者との違いを形成することにもなった。

大衆の時代が到来した明治後期、言論界に影響力を持った人物たちは、この分断した明治中期の落とし子であった。大学で勧められる新しい学風を社会の下層部に伝える媒体となる大衆新聞の編集者が、分断した思想傾向のどちらに属していたかが、その後の大衆の思想傾向にも影響を与えていただろう。新学風に触れた帝国大学出身の秋山の失脚によって、旧学風の実学傾倒の黒岩の隆盛は、即ち古典尊重から古典軽視の流れへと大衆の関心を大きく転換させる要因になった。

ギリシヤ思想研究の黎明期である明治中期の言論界では、様々な雑

誌で取り上げられ、東西の古典を取捨選択しながら日本の歴史と結びつけていく試みが、あらゆる立場からなされており、日本においてギリシヤ思想が自らの精神史の一部に取り入れられる準備がなされていなかったわけではない。識字率が九八%を越え大衆の時代となったとき、ギリシヤ思想受容の最盛期に達するはずの明治三六（一九〇三）年、日本は同時に日露戦争という局面を迎えてしまった。

福澤が封建的社会からの脱却を図るために、一度日本を儒教の「惑溺」から解放することは合理的な判断であった。しかしながら、既存のものに従う精神そのものから解放させることはなく、従来の儒教思想から福澤ら権威が作り上げた秩序にただ従う人々を生み出してしまったのではないか。序章で取り上げた内山氏によって抽出された古代ギリシヤ思想に特有の特質であった「批評主義」と「根源的思考」は既成の概念に捉われず自ら思考する思考プロセスである。明治時代を通した西洋思想の取捨選択の中で、「批評主義」と「根源的思考」による真実追究の姿勢を学び取っていけば、そのものが「惑溺」から解放させる役割を担ったかもしれない。

- 一 富永健一『思想としての社会学 産業主義から社会システム理論まで』新曜社、二〇〇八年、IV頁。
- 二 内山勝利『古代ギリシア・ローマ』『学術月報』五三号、二〇〇〇年、一二三六—一二三九頁
- 三 大久保利謙『明六社』講談社学術文庫、二〇〇七年、二二二—二二六頁
- 四 富永健一『思想としての社会学 産業主義から社会システム理論まで』新曜社、二〇〇八年、四頁。
- 五 右記、九頁

- 六 右記、七頁。
- 七 右記、七三頁。
- 八 右記、七九頁
- 九 松本三之介『明治精神の構造』岩波書店、二〇一二年、三七頁。
- 一〇 前掲、富永『思想としての社会学 産業主義から社会システム理論まで』、九三頁。
- 一一 前掲、松本『明治精神の構造』、三八頁
- 一二 松浦玲『文明の衝突と儒者の立場—日本における儒教型理想主義の終焉（三）—』『幕末維新の文化』、十八頁
- 一三 桑木巖翼『日本哲学の黎明期』、書肆心水、二〇〇八年、二〇頁。
- 一四 山室信一、中野目徹校註『明六雑誌（上）』岩波文庫、一九九九年、一一七頁。
- 一五 田村正紀『消費者の歴史』千倉書房、二〇一一年、六一頁。
- 一六 平山洋『大西祝とその時代』日本図書センター、一九八九年、頁
- 一七 柿沼肇『近代日本の教育史』教育史料出版会、一九九〇年、頁。
- 一八 右記、四四頁。
- 一九 右記、七八頁。
- 二〇 右記、七九頁。
- 二一 右記、八一頁
- 二二 右記、八四頁。
- 二三 大久保利謙『明六社』講談社、二〇〇七年、四八頁。
- 二四 西田長寿『日本ジャーナリズム史研究』みすず書房、一九八九年、一八一頁。
- 二五 箕作麟祥『人民の自由と土地の気候と互に相関するの論』『明六雑誌』第四号、岩波書店、一四五頁。
- 二六 有山輝雄、竹内昭子『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇四年、五一号。
- 二七 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、一九八一

- 年、六〇頁。
- 二八 右記、山本『近代日本の新聞読者層』六九頁。
- 二九 渡辺和靖「明治中期の思想的課題（二）―井上哲次郎と大西祝―」『日本文化研究所研究報告』第十集、一九七四年、百一頁。
- 三〇 渡辺和靖「明治中期の思想的課題（二）―井上哲次郎と大西祝―」『日本文化研究所研究報告』第十一集、一九七五年、七四頁。
- 三一 西田長寿『日本ジャーナリズム史研究』みすず書房、一九八九年、一八八頁。
- 三二 平山洋『大西祝とその時代』日本図書センター、一九八九年、八六頁。
- 三三 桜田倶楽部編『秋山定輔伝』桜田倶楽部、一九九七―一九八二年、五四頁。
- 三四 右記、五二頁。
- 三五 桑木徹翼『日本哲学の黎明期…西周の『百一新論』と明治の哲学界』書肆心水、二〇〇八年、一五六頁。
- 三六 沖田行司『日本近代教育の思想史研究』日本図書センター、一九九二年、一七七頁。
- 三七 前掲、平山『大西祝とその時代』頁。
- 三八 右記、一二八頁。
- 三九 右記、六五頁。
- 四〇 納富信留『プラトン理想国の現在』慶應義塾大学出版会、二〇一二年、七一頁。
- 四一 久木幸男「解説 教育報知と日下部三之介」『教育報知復刻版』ゆまに書房、一九八六年、五頁。
- 四二 「発行の趣旨」『女学雑誌』創刊号、頁。
- 四三 「學者安身論」『女学雑誌』第二百八十六号、十八九一年、一二頁。
- 四四 「改革者となる乎 随従者となる乎」『女学雑誌』第二百五号、一八九〇年、四頁。
- 四五 野辺地清江『女性解放思想の源流―岩本善治と『女学雑誌』校

- 倉書房、一九八四年、九頁。
- 四六 青山なを『女学雑誌』解説『複製版「女学雑誌」別冊一』臨川書店、一九六七年、三頁。
- 四七 前掲、「発行の趣旨」『女学雑誌』創刊号、頁。
- 四八 加藤弘之「品行論」『女学雑誌』四十九号、六頁。
- 四九 右記、七頁。
- 五〇 元良勇次郎「非男尊女卑を論じて和田垣法學博士に質す」『女学雑誌』、二百八十七号、三〇七頁。
- 五一 前掲、元良「非男尊女卑を論じて和田垣法學博士に質す」『女学雑誌』、二百八十七号、三〇八頁。
- 五二 前掲、野辺地『女性解放思想の源流―岩本善治と『女学雑誌』』十頁。
- 五三 前掲、野辺地『女性解放思想の源流―岩本善治と『女学雑誌』』九頁。
- 五四 中野久美子『文学の視座からの青木繁における美的仮象の創造…明治期ロマン主義受容の射程』松本工房、二〇一〇年、六〇頁。
- 五五 右記、一二九頁。
- 五六 右記、六一頁。
- 五七 前掲、田村『消費者の歴史』千倉書房、二〇一一年、一一二頁。
- 五八 前掲、山本『近代日本の新聞読者層』頁。
- 五九 前掲、有山、竹山『メディア史を学ぶ人のために』一〇八頁。
- 六〇 前掲、山本『近代日本の新聞読者層』一九二頁。
- 六一 右記、一九四頁。
- 六二 前掲、納富『プラトン 理想国の現在』一一四頁。
- 六三 川崎宏「木村鷹太郎攷序」『英学史研究』六号、一九七三年、五二頁。
- 六四 前掲、納富『プラトン 理想国の現在』頁。
- 六五 右記、一〇九頁。
- 六六 前掲、山本『日本の新聞読者層』頁。

- 六七 桜田倶楽部編『秋山定輔伝』桜田倶楽部、一九七七年、四四頁。
六八 右記、一二一頁。
六九 土屋礼子編著『近代日本メディア人物誌 創始者・経営者編』
ミネルヴァ書房、二〇〇九年、九五頁。
七〇 右記、九六頁。
七一 高橋康雄『物語・万朝報…黒岩涙香と明治のメディア人たち』
日本経済新聞社、一九八九年、三四頁。
七二 右記、六五頁。
七三 前掲、山本『近代日本の新聞読者層』一五二頁。